

平成 30 年 6 月 13 日現在

機関番号：35305

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04465

研究課題名(和文)シュルレアリスムの視点から「イメージの借用」を展開する幼児の描画発達の実践的検証

研究課題名(英文)Practical Study of Drawing Skill Development among Children that Expands Borrowing Images from the Perspective of Surrealism

研究代表者

小田 久美子 (ODA, Kumiko)

ノートルダム清心女子大学・人間生活学部・准教授

研究者番号：10461229

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：白紙に絵を描くことに逡巡する子どもを一人でも多く救う手だてを講じることは、教育・保育現場にとって急務であると言える。そこで幼稚園と大学の連携により、子どもの描画発達を促進する支援の推進を喫緊の課題として研究を進めてきた。結果、描画発達の停滞を打破するには、言語的刺激と他者からの図像イメージを借りる「イメージの借用(Borrowing Images)」という視覚的刺激が突破口になるという結論に達する。言語的にも視覚的にも自由なイメージの喚起力を備えたシュルレアリスムの視点に着目して、イメージの生成に寄与する活動の検証を進め、幼児教育と鑑賞・表現教育、芸術と援助の方法を統合した教育実践を展開した。

研究成果の概要(英文)：Many children hesitate to draw or paint when faced with a blank page, and it may be said that devising a means to help as many of them as possible is a pressing need in school and pre-school education. Therefore, through kindergarten・university cooperation, we have been carrying out research as an urgent task to promote support for advancing children's drawing skill development. This research reached the conclusion that the key to breaking through stagnation in drawing skill development is linguistic stimulus and the visual stimulus of 'borrowing images' from others. Focusing on the perspective of surrealism, with its ability to evoke open images both linguistically and visually, educational practices combining children's education and appreciative and expressive teaching, as well as methods of art and support in encouraging children's drawing skill development, have been developed by promoting studies on the validity of activities which contribute to the generation of images.

研究分野：幼年造形教育

キーワード：子どもの描画 美術教育 イメージ シュルレアリスム

## 1. 研究開始当初の背景

これまで幼稚園と大学の連携により、子どもの描画発達を促進する支援の推進を喫緊の課題として、教育実践研究を進めてきた。子どもは、絵画的図式を獲得しながら表象活動を進めていくが、表現力の「衰退」(H.Gardner・1980)とみられる時期が来る。その時に、形の見立てによってイメージを活性化させることで、図式の単調化を防ぎ、より創造的な絵画表現を引き出すことが可能であるとこれまでに明らかにした。さらに描画発達の停滞を打破するには、言語的刺激と他者から図像イメージを借りる「イメージの借用(Borrowing Images)」(B.& M.Wilson・1987)という視覚的刺激が絡むことになるという結論に達した。造形遊びの基礎的技法として子どもに親しまれているデカルコマニー・フロッターージュ・コラージュは、シュルレアリスム絵画の中で発展・工夫された技法であることは知られている。シュルレアリスムの作品において、イメージの優位性は偶然や見立てをもって完成されている。そこで、シュルレアリスムのイメージの借用を、偶然の発見の中に形を見立てる活動として教育実践に取り入れる、という本研究の着想に至った。「描画の発達は、時として描画行為中における偶然の出来事によって、大きく躍動する」(Wilson)と指摘されていることから、芸術作品を鑑賞しながらデペイズマン(意外な組み合わせ)及び偶然性を手がかりにして、新しい図式・概念の獲得や柔軟化を導く方法論の効果を実証することで、子どもの描画発達に配慮した手だてを提示することが出来ると考えた。これまでに着手した研究を基盤に、言語的にも視覚的にも自由なイメージの喚起力を備えたシュルレアリスムの視点に着目した、具体的な造形遊びの検証が必要である。したがって絵画表現に躓きを見せている子どもがともに楽しめる活動を用いながら、遊びと学びの融合を図る。

## 2. 研究の目的

(1)平成27年度は文献研究と並行して、幼稚園教諭との連携のもとで保育者の人的環境としてのあり方・役割に関して考察しながら造形プログラムの策定を行い、調査を実施することで、実践に向けた検討を進める。  
 (2)平成28年度は、平成27年度に得られた知見を基盤に、作品の実態や背景、表現活動の動向を現地で調査することでシュルレアリスム絵画の作品や技法から効果的に子どもの描画発達を引き出すよう配慮された援助方法を導く。  
 (3)平成27~28年度の継続研究として幼稚園児を対象にした観察・データ収集を行う。小学校図画工作科へのスムーズな連携を見込み、絵画作品を用いた鑑賞と子どもに親しみのある技法による表現を融合した造形遊

びの実施および検証を行っていく。シュルレアリスムの技法を援用した造形遊びとしてデカルコマニー、フロッターージュ、コラージュ技法を調査に使用する。それぞれの技法遊びに芸術作品の鑑賞を導入として採用することで、視覚的刺激だけでなく言語的刺激を取り入れイメージの獲得と変化に資する絵画プログラムの実践的研究を進める。

## 3. 研究の方法

(1)調査・観察を実施する対象者は、岡山県内私立S幼稚園の園児で、分析の視点と分類項目にしたがって年齢別に整理・分析・考察していく。対象:S幼稚園年長児学級(A組31名、B組29名、C組31名)総計91名  
 造形遊びと観察:植物・動物・人物に関連した美術作品(R.Magritte・1946, P.Picasso・1973, F.Pompon・1927)の鑑賞を導入として、イメージの借用が可能な6つの調査を実施する。クラスごとに実施し、画用紙の裏には名前を書く。調査中の対象者の態度、調査への興味など、気づいたことは個人別にまとめておく。対象者の描画への興味を確かめながら、楽しい描画活動であることを徹底する。効果的に研究を進めるために、あらかじめ各クラス担任から、造形活動にあまり積極的ではない子どもの人数とその対象児についての聞き取り調査を行っておく。  
 描画材料:八つ切り画用紙16色パス 結果の整理方法:子どもの絵画表現を比較検討するために、次のような分析の視点と分類項目を設定した。(a)色数(b)着色面積(c)表現内容のカテゴリー分析(色彩 線と形 構図 テーマ)・固有色を使っている・固有色を使っていない・物の形を描こうとしている・無造作な描画か塗色だけである・天地の関係がわかる・個々をばらばらに描いている・創作の絵を加えている・何を描いているかわからない。

(2)描画発達の効果が期待されるシュルレアリスム作品を利用して、イメージの生成に寄与する活動を臨床応用するための妥当性の検証を行う。現地ではフィゲラスの劇場美術館を視察し、作品の導入方法 保育者の援助 素材や技法の選定 物的環境、の項目に関して写真撮影・聞き取りによる調査と資料収集を行う。現地調査の成果を踏まえて、芸術作品を用いた造形プログラムを構築し、同じくS幼稚園の園児により継続的・縦断的に、その発達の変容と効果について総合的に検討するため、芸術作品の鑑賞を取り入れ偶然性を手がかりにした作品作りを通して、図式・概念の獲得や柔軟化を導くという活動の効果を実証することで、子どもの描画発達を促進する新しい実践論を報告する。

(3)対象:岡山県内私立S幼稚園 年長児学級(A組21名) 造形遊びと観察:デカルコマニー、フロッターージュ、コラージュのそれぞれの技法の説明をし、4つの関連した

美術作品（M. Ernst・1940-1942, 1926, 1925, 岡本淑子・1954）を鑑賞してイメージを膨らませた後、それぞれの技法遊び（デカルコマニー、フロッタージュ、コラージュ、フロッタージュ作品を用いたコラージュ）を行った。作品の裏には名前を書く。調査中の対象者の態度、調査への興味など、気づいたことは個人別にまとめておく。対象者の描画への興味を確かめながら、楽しい描画活動であることを徹底する。効果的に研究を進めるために、あらかじめクラス担任から、造形活動にあまり積極的ではない子どもについての聞き取り調査を行っておく。描画材料：八つ切り画用紙 A4 サイズコピー用紙 水彩絵の具（赤、青、黄、白、茶、黒）絵の具の溶き皿 筆 12色水性フェルトペン 12色パステル ハサミ 糊 結果の整理方法：子どもの絵画表現を比較検討するために、研究結果を精査した分析の視点と分類項目を設定する。平成29年度は、本研究に与えられた3年間の調査実施によって明らかになった結果から精密なデータの上に立脚した教育実践方法を論述する。

#### 4. 研究成果

以下、主な研究成果の要約を報告する。

(1) 具体的な内容としてまず、子どもの絵画的表象の発達を「図式獲得と抑制」の見地から整理する。次に、芸術領域を応用した環境として、絵画的表象の活性化を目指した2つの刺激の有効性について考察した。1つ目は作品の鑑賞を行うことによる言語的・視覚的刺激、2つ目は芸術作品を用いた視覚的・言語的刺激である。言語的・視覚的刺激をうまく取り入れることで、小学校図画工作科へのスムーズな接続が期待される幼年造形教育を論究した。研究成果は、研究論文「『図式』獲得と抑制にみる言語的・視覚的刺激の可能性」として、平成28年3月発行の美術科教育学会誌『美術教育』と、研究論文「R. Magritte, P. Picasso, F. Pompon が導く造形プログラムの試み」として、平成30年3月発行のノートルダム清心女子大学紀要『人間生活学・児童学・食品栄養学編』にて発表している。

(2) 小学校図画工作科につながる就学前美術教育を目指して、2つの刺激を用いた表現活動と鑑賞活動が融合される造形プログラムを、美術作品を特殊で専門的なものとしてみるのではなく、子どもの身近で親しみのある技法遊びから考察し、子どもの描画発達を無理なく促進するために必要な基盤的理論の流れ、およびその意義を確認した。研究結果は、研究論文「見立てによりイメージを媒介させた絵画的アプローチの妥当性を検証するための基礎的研究 - 親しまれている幼児期の造形遊びの応用を目指して - 」として、平成29年3月発行の日本美術教育学会学会誌『美術教育』にて発表し、言語的・視覚的・聴覚的という表現活動に直接働きかける手段

だけでなく、実践学研究的観点から造形表現活動を活性化させる支援の可能性を示している。

(3) イメージの借用を幼児期の教育実践に取り入れることで「描画にモノのイメージを見立てながら、絵を変化させていく」(齋藤・2014)ことが可能になり、描画発達を促進するための有効な手がかりになることが確認された。活動の導入として作品鑑賞をすることで言語的・視覚的刺激を、そして子どもの絵画的表象の活性化を目指して、偶然性からの創造に特化しているシュルレアリスム絵画とその技法を用いたイメージの借用を視覚的・言語的刺激として、2つの刺激を取り入れるという知見を紡ぎ出し、実践的な援助方法論を構築した。研究論文「シュルレアリスムの技法を援用した絵画プログラムの中で獲得する子どものイメージの変化に関する実践研究」として、平成30年3月発行の大学美術教育学会誌『美術教育学研究』にて発表した。

今後も就学後の子ども達だけでなく、就学前の子ども達にも様々な芸術作品の鑑賞に触れる機会を含んだ造形遊びを用意することで、小学校図画工作科への連携を見込んだ実践的研究の有効性を確認するとともに、造形遊びに関わる人的環境としての保育者のあり方・役割について検証を進めていく。

また子どもの描画発達に関する研究を検証資料にもとづく原著論文として執筆し、学術雑誌に積極的に発表することによって、我が国の幼児教育・芸術教育・教育実践学研究的発展に寄与したい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

小田久美子：「『図式』獲得と抑制にみる言語的・視覚的刺激の可能性」, 美術科教育学会誌『美術教育学』(ISSN 0917-771X), 査読有, 第37号, 195-205頁, 2016年3月。

小田久美子：「『見立て』によりイメージを媒介させた絵画的アプローチの妥当性を検証するための基礎的研究 - 親しまれている幼児期の造形遊びの応用を目指して - 」, 日本美術教育学会学会誌『美術教育』(ISSN 1343-4918), 査読有, 第301号, 8-13頁, 2017年3月。

小田久美子：「シュルレアリスムの技法を援用した絵画プログラムの中で獲得する子どものイメージの変化に関する実践研究」, 大学美術教育学会誌『美術教育学研究』(ISSN 2433-2038), 査読有, 第50号, 137-144頁, 2018年3月。

小田久美子：「R. Magritte, P. Picasso, F. Pompon が導く造形プログラムの試み」, ノートルダム清心女子大学紀要『人間生活学・児童学・食品栄養学編』, 査読有, 第42巻第1号(通巻63号), 20-29頁, 2018年3月。

## 6 . 研究組織

### (1)研究代表者

小田久美子 (ODA, Kumiko)

ノートルダム清心女子大学・大学院人間生活  
学研究科・准教授

研究者番号：10461229